

第6回国土交通中部地方有識者懇談会  
「まんなか懇談会」  
(第6回提言分)



平成15年6月27日開催

## 1. 基調発言

- 松尾 稔 委員（名古屋大学総長） -



### 社会資本整備には100年先を見据えた長期的な視野が必要

社会資本の特徴から見た検討視点のあり方についてですが、ここで言う社会資本とは国交省が扱っている、もっとはっきり言うと土木の分野が関連するものと私は考えています。文明と言いますか、高度技術社会の根幹を支えているものとしての社会資本についてお話をしたいと思います。

社会資本というものは3世代、4世代先の長期スパンで考えなければなりません。そうはいいつつも、私のような凡人では将来を予測するのはなかなか難しいことで、知識・知恵を結集してこれを考えていく必要があります。国の将来を考えたビジョンを描き、せめて100年先を見据えた形で長期目標を持った、いわゆるグランドデザインを仕立てるべきであると常々考えております。

先ほど言いましたように100年先を予測するという事は難しいことでもありますから、グランドデザインは進化性を持っていてよいと思います。20年なら20年ごとに点検・評価をして見直していくということがあってもよいのです。しかし、まず長期目標、それも100年というくらいのスパンで考えるという習慣を、社会資本に携わる我々は持たなければならないのではないかと考えております。

### 社会資本は3世代、4世代先の子孫と負担・責任を共有するもの

短い期間を考えることももちろん重要であります。通常、短期計画といいますと、半年から1年、2年の計画をいいます。社会資本にとっては10年、20年というスパンが短期計画に当たり、40、50年くらいが中期計画に相当します。私はこのような点において通常の技術が関わる問題と社会資本を考えていく場合では問題が異なってくると思っております。例えば年金とか税制等に関しては40～50年を考えるのは当然ですが、技術そのものが関わる分野の中では、社会資本はこのように計画スパンが長いという点に特徴があります。

それはなぜかといいますと、社会資本というのは多くの場合、環境と同じく、次世代、3代、4代先の人たちと価値観を共有しなければならないからです。いわば負担も責任も3代、4代先の人たちと共有しなければならない。それは3世代、4世代先の納税者への責任でもあると思うからです。

### 可逆性のない社会資本整備によって先の世代の価値観を縛るべきではない

多くの場合、土木というものには可逆性がありません。建築物の場合は、取り払って更地にするということはあるかもしれませんが、山地、河川、地盤沈下というものを考えても、土木が関連する問題には不可逆の問題が非常に多いのです。そういうことを十分に念頭において、かつ認知しながら社会資本整備を考えていかなければいけません。そういうことに関して、私は「壊せる技術」というものを20年ほど前から言ってきました。我々には先の世代の人たちの価値観を完全に縛ってしまう権限はない。車の機能も道路の機能も変わっていく。一方ではセキュリティという問題もある。そういったものと関連させながら、可変性と言いましょか、

「壊せる技術」というようなことも十分に念頭において、具体的なものを計画・実施していかなければならないと思います。

### **文明そのものを担っていくという気概と時代を先見できる人材を育成する必要がある**

通常の技術では、コストパフォーマンスが非常に重要になるわけですが、現在のコストパフォーマンスだけで考えることができないのが社会資本を造っていく土木工学の特徴であります。「技術＝スピード」ということがいつも言われますが、土木においては「技術＝スピード」が成り立たない。土木とは他の分野に比べて特別な工学分野であるということ、言葉をいい換えますと、世代を超えた技術であるということ認識しなければいけないと思っております。

社会資本を築くためには、優秀な人材を育成することが大事であり、このことは社会資本に関係する我々がよく考えていかなければならないことです。我々も含めてですが、若い人たちの間に文明を担っていくという気概が希薄になってきている。文明というものは、梅棹忠夫氏の定義によりますと、「人と装置と制度からなる巨大なシステム」ということになります。装置の中でも社会資本は最も根幹的な装置でありますから、社会資本を築くためには、文明そのものを背負っていくという気概が求められます。したがって、時代を先見できるような幅広い教養を身につけていかなければなりません。今はどの分野でも専門分科、細分化が進んできておりますが、幅広い教養を身につけた人材の育成が必要であると思っております。

それから、3世代、4世代先のことを考えますと、「死すべき人間」ということも念頭におく必要があります。自らがすでに存在しない先のことを考えるという自覚を持つ人が若い世代の中にも育っていく必要があるのではないだろうかと思っております。

### **余力のある間に質を重視した社会資本整備を進めることが必要である**

東西の冷戦構造が崩壊し、政治経済、産業構造等々あるゆる分野でパラダイムの大変換が始まっております。現在はその真っ只中ではありますが、私はこれからの時代こそ再び土木の時代、あるいは建設、建築の時代だと思っております。その背景には、戦後我が国が社会資本を急速に立ち上げてきたため、現在では社会資本の「質」に関する問題が生じつつあるということがあります。構造物ひとつ取りましても、防災等のことも考えますと、我が国に余力のある間に社会資本の質を高めていく必要があるのではないかと考えております。

ですから、近頃元気のない建設関係の若い方々には、「これからこそあなた方の時代だ」と叱咤激励しているところでございます。

### **将来的に大きな影響を及ぼす制約条件についての正確な見通しが必要**

社会資本を考えるうえで、20年あるいは30年ごとに100年先の計画を進化性を持って見直すとしても、将来的に影響を及ぼすであろう制約条件を正確に見通していく必要があります。例えば人口に関しては、上位推計、中位推計、下位推計と将来予測を行っておりますが、こういうことを見据えつつ、将来の計画を考えていく必要があります。我が国の人口は、50年先には中位推計で1億人弱くらいになるだろう、100年先には数千万人くらいになるだろうと予測されています。そうしますと、労働力、生産性はそのままでは低下してしまいます。そういう中で、経済活動を活性化させていくためにはどうするか、そのための社会資本はどうするべきかという問題が当然出てくるわけでありまして。

また、世界の中の日本ということでも将来の社会を考えていかなければなりません。今後外国の方々を広く日本に受け入れていく場合、我々が持っている日本古来の文化・慣習が整合するのかという「内なる国際化」という問題もまた重要になってくると思います。

そして、人々の価値観が変わってきています。物質的な豊かさをまず求めるのは当然のことですが、それに加えて、「安全に、安心して生きる」ということを求めるように豊かさに対する考え方が変わってきています。「まんなかビジョン」でも中心的なテーマとして扱われておりますが、安全で安心な生活を保障する社会資本、環境等といったものがますます重要になってきています。

### **地方分権のもと官民一体となって地方の活力を高めなくてはならない**

私はもともと、地方分権、道州制等の支持者であり、この頃も随分話が出てきましたが、権限その他を中央から地方へ移して、民間の活力をいただいて、知恵を入れて、効率を上げて社会資本整備を進めて行かなくてはならない。私も国家公務員ですが、国家公務員の姿勢、自己開発とか自己啓発といったところも必要になってくると思っております。

### **コンパクトな地方拠点形成を進めるためには重点投資と優先順位を決める必要がある**

将来の国づくり、まちづくりに関する私の持論はコンパクトな拠点を形成して、その拠点と拠点を結ぶ幹線インフラを整備する、重要な社会基盤は互いに地域が連携して効果的に造り、共有していくというものです。最近では「コンパクトシティ」という考え方は普通に使われるようになってきましたが、これは一つのまちの中で考えると、たとえば鉄道の駅等をコアにして、駅周辺を拠点として重点的に整備するということであり、もっと大きく考えれば、名古屋や岐阜等を拠点にして、都市間には緑地を配し、重要なインフラを作っていくということであります。

それを考えますと重点投資と優先順位が不可欠でありまして、その重点投資も時間的なことを十分念頭においた重点投資をしていく必要があります。余力のあるうちに着実に実施していかなければなりません。先ほども申し上げましたが、戦後我々が急速に造ってきた社会資本がほとんど同時期に劣化してまいりますので、それに対応することが必要であります。

### **社会資本整備には社会的な合意形成と人々の考えを計画に表現していくリーダーシップが必要**

いずれにしても、どのような問題に関しても社会的な合意が必要であって、すべてオープンであるということが原則であります、ユーザーの視点、つまりそれを使う方々の視点というものが必要であります。

しかし、そのとき必ず考えなければいけないのは、3世代、4世代先のことであります。そのためには、国民への啓発ということも必要になってくるかと思えます。市民の参画、アンケート、討論会、ワークショップなどがありますが、大計画・中計画・小計画、長期計画・中期計画・短期計画とすべてに渡って3世代、4世代先のことを考えてもらわなければいけないということをわかっていただかなければいけないと思います。

専門家というのは往々にして専門的、科学的情報はたくさん持っておりますが、地域の情報はほとんど持っていないのが常であります。ですから、専門家の陥りやすい自己過信がこうい

うところに出てまいりますので、やはりこれからの人は、使う人自身が生きていく力や、生きていく方法を自分自身で考えてもらう、主役はどちらか、誰が主役かということを考えていってもらうことが必要であろうかと思えます。

アーバンプランナー、国土計画や都市計画を行う行政に携わる人々は自分の考えを人々に押しつけるのではなくて、人々の考えを絵にする人であるべきです。社会資本整備に携わる人々にはリーダーシップが必要だと思っております。押しつけるのではなく、住民の方々、あるいは将来の方々のことを考えて、多くの人々の地域に対する想いを計画に表現していけるようなリーダーシップが必要ではないかと思っております。

## 2. 自由討議

- 水谷 研治 委員（中京大学経済学部教授） -



### 100年先を見据えた長期的な視野の必要性をしっかりと打ち出すべき

ただ今の松尾委員の意見に全面的に賛成です。社会資本整備においては100年先を見据えるべきであり、3世代、4世代先まで考えて、負担も責任も共有すべきだと思います。

しかし、現実を見ますと、これとは全く逆であり、社会において短期的な思考が増えていると私は思っています。企業の行動を見てもそうであります。本来10年くらい先まで見なければいけないであろうにもかかわらず、1年、あるいは上期、下期といった非常に短いスパンで物事の判断を下すという傾向になってきております。この傾向はおそらく今後とも続くのではないのでしょうか。

一方で、自分にとってプラスであれば賛成、マイナスであれば反対するという人々が多くなっているように感じます。いつの間にそういう恥ずかしい日本人になってしまったのかと思うわけであります。自分にとってプラスかマイナスかということだけで価値判断をするというのは誠に下劣でありまして、やはり将来のためにプラスであるかマイナスであるかということが判断基準であるべきであると思っております。

そのような今の時代であるだけに、我々が中部の将来を考えると、今松尾委員が仰った理念を大きく打ち出していくべきであると思っております。我々がまんなか懇談会を開催するにあたっては、100年先を見据えた観点を持って進めていくということをはっきりと打ち出していく必要がある。そうでなければ、例えば、我々がいろいろなご意見を伺うときに、そのとき社会から出てくる意見は今の時世を反映してしまい、目先のもの、自分たちにとってのみプラスになるものだけが出てくるでしょう。ある長期計画が将来の社会にとってどんなにプラスであったとしても、今その計画が自分たちにとってマイナスであると人々が短期的な観点から判断をすれば、その計画は実現しないということになってしまいます。そうであってははいけませんから、この理念は一番最初にしっかりと我々の腹に入れておく必要があるのではないかと感じました。

- 須田 寛 委員（東海旅客鉄道（株）取締役会長） -



### 100年先に残るようなインフラを今こそよく考えてつくるべき

今から100年前というのは明治36年ですね。明治36年には、今私どもが使っている交通インフラのかなりの部分が既に出来上がっていたわけです。東海道線は明治22年に開通しておりますし、武豊線は明治19年に開通しています。亀崎の駅舎は明治19年にできていますから、もう120年くらいそのまま使っています。トンネルも鉄橋も当時のものを少し手直しする程度で現在も使っている所が非常に多いのです。私どもがこれから100年先に何を残してやるのか、何を残してやるべきなのかということこそそろそろ考えなくてはいけない時代に来ています。我々には身近な問題であります。ここにおられる方々は、私も含めて100年先には誰もおりませんから関係がないように思われますけれども、そうではなくて、インフラは今しっかり作らなくては100年先に残るものはいけません。

### 100年先の最適人口を設定し、それを念頭に社会資本整備を考えるべき

先ほど松尾委員の発言にもありましたが、一番ベースになるのは100年先の人口をどういうふうにかえたらよいかということです。下限の人口推計では、6,000万人くらいになるのだそうです。これは現在の人口の半分です。果たしてそれで社会は形成できるのかという問題が生じます。したがって、これだけは推計して考えるよりも、むしろ「こうあるべきだ」というものを私どもが考えるべきではないか。例えば、今までどおりの1億人以上の人口規模がよいのかどうか。8,000万人、9,000万人といろいろな人口規模を考えてみたときに、日本にとって最適なレベルの人口があると思います。それはシミュレーションすればできるわけでありませぬ。例えば、仮に8,000万人くらいを理想人口として考えれば一番よい社会ができると思います。我々はそれを念頭において、そのときに残すべきインフラを作っておいて、100年後の人々がよい生活ができるように今から考えてあげなくてはなりません。

人口の推計をはっきりしないと前提が進まないわけですが、人口というものは推計に頼らずとも、やろうと思えばある程度人為的に計画できるものであります。私どもの子供の頃は「産めよ殖やせよ」と言いまして、10人以上子供がある人を国が表彰したわけですが、考えようによっては、10人は産まないにしても人口というものはある程度増減ができるわけですね。どれだけの人口が一番適切かという指標があれば、ある程度それに合わせてこれから後の世代の人々が努力をすれば最適な人口を作り出すことはそれ程難しいことではありません。ただ、データが全くありませんので、目標が全くありません。今のまま推移すれば、人口が減るのは当たり前であります。

私どもがやるべきことは、将来人口の推計のみならず、将来人口の最適な目標がどこにあるのかを見定め、それに基づいて我々なりに100年後の日本人のために一番よいと思われる状態を考えたインフラを今から作っておくべきことだと思います。

今ここにいらっしゃる方々は100年後、誰も生きておりませんが、100年後に生きているかもしれない人が既に生まれています。今年生まれた人の中には、きわめて希少であるけれども、100年後にも生きている人がいるかもしれない。20年後に生まれてくる人の中ではそのほとんど

どの人が100年後にも生きているでしょう。そういう人々が学校教育を受ける前にたたき台となる将来ビジョンを作っておいてあげないと、これからもずっと混迷の時代が続くのではないのでしょうか。子どもが生まれたときには100年後の日本のことを考えていた人はほとんどいませんでした。我々はいろいろな試行錯誤を繰り返して、大失敗をしてきました。それだけは繰り返されてはいけません。将来の社会は何人の人口が最適であり、このようなモデルが考えられる、そのために我々は今これだけ用意をし、あとは先の世代の方々にがんばってもらう。そのような指針となるものがあればよいのではないかと感じております。

- 奥野 信宏 委員（名古屋大学副総長） -



#### 40、50年先に向けた国づくりの中期目標を設定すべき

松尾委員のご発言では、社会資本整備の場合、40年、50年が中期、100年が長期だということですが、40、50年先の中期計画を考えるには、中期的な目標は何かということを考えなくてはならないと思います。

例えば、今から40年前というと昭和30年代の終わりです。あの頃の目標、理念は何だったかということ、「国土の均衡ある発展」ということだったと思います。これは社会資本整備の効率的な配置を検討していくなかで社会的な公平を実現していくということだと思っておりますが、半世紀の間「均衡」という言葉がいろいろな意味に使われ、各時代でその時代の解釈に合わせて役割を果たしてきました。そのため、今や「国土の均衡ある発展」という言葉は理念としてほとんど意味をなさなくなっているのではないかと思うわけです。次の40年、50年先に向けた中期計画の目標をどのように理念として設定するのかということを考えなければいけないのだらうと思います。

#### 大局的な視野を持った優秀な人材を育成する必要がある

「3世代、4世代先のことを考える国民を育てるべきである」という松尾委員の発言に関して私も同感です。例えば、経済学において社会資本を考えると、最終的には国民や住民の厚生がどれ程向上したのかということによって評価するわけです。したがって、住民の声を聞く、国民の声を聞くということが大事なことになります。

しかし、社会資本整備においては、ただ住民の方々の声を聞いていれば、地域あるいは国家として望ましいものができるかということ、それは難しいのではないかと思います。一般の住民の方々にとっては、3世代、4世代先の将来という自分の生涯を超えることや地理的に自分の関心を越えた遠くのことはなかなか考えが及ばないのではないかと思います。そのような住民の考えを集約して一つの意見を作ったとしても、それで望ましいものができるということでは決してないわけです。したがって、3世代、4世代先のことや地理的に離れたことも考えることのできる人材を特別に育成する必要があると思います。私はそのような意味でも人材育成の大切さを感じました。

- 中村 幸昭 委員（鳥羽水族館 館長） -



### 将来日本の人口が大きく減少したときにどのように社会的なバランスをとっていきかが問題

松尾委員の素晴らしいビジョンを伺いまして感銘を受けました。人類が空を飛ばたいという夢を叶えたのはライト兄弟です。1903年のことですから、ちょうど100年前になります。ガガーリンが宇宙を飛んだのは50年前からになります。また、アポロが月に行ったのも30数年前です。100年先にどうなるかという予測は非常に難しいですけれども、先ほどの人口問題については、国連のデータでは、世界の総人口は62億6,000万人になるとのことです。統計によれば1秒間に3人が死んでいる一方で、1秒間に6人赤ちゃんが生まれているというのが実態でありまして、このままでいくと人口爆発になると言われております。

また人類にとって一番恐ろしい病気としてはエイズがあります。エイズは特效薬ができておりませんから、このままでいくと5年、10年先には1年に1億人以上死んでいくのではないかといい統計さえあるわけでありまして。

日本について見てみますと、現在総人口が1億2,600万人で、去年生まれた赤ちゃんが120万人。今年成人式を迎えたのが137万であります。では、中国はどうかと申しますと、20年後に成人式を迎える人は1,500万になるということで、労働力その他においてとても太刀打ちできないということになります。日本の人口が6,000万人、8,000万人に減ったときに、どのような均衡でバランスを取っていくかという問題が一つあります。

### 科学技術が発達する中で文明を構築していけるハートを持った人材の養成が最も重要

エネルギーの問題に関して申しますと、現代は化石燃料を中心に使っておりますが、いずれ自動車については電池になるでしょうし、太陽光発電ももっと進むであろう。原子力発電は危険性があるので減っていくのではないかと思います。中央リニア新幹線にもヘリウムあるいは窒素が用いられると専門家は言っておりますし、エネルギー問題においては飛躍的に新しいエネルギーが誕生するのではないかと思います。

また、技術革新が驚異的な数字で起こっておりますから、人間が足りない分はロボットで補うという、ロボットの新しいシステムができてくることであらうと思います。しかし、科学技術が発達することによって、人間の心が失われるということが一番問題ではないかと思います。最終的には人間のハートの問題でありますから、文明を構築するための先見性をみるという技術、つまりシンクタンクの養成ということが一番大事になってくるのではないかと考えております。

- 箕浦 啓進 委員（中日新聞社 メディア局長） -



### 時代の変化を先読みしながら計画を見直していくことが大切

100年先の社会資本ということを考える場合に、100年後に道路がどうなっているかを考えてみますと、100年前に作られた道路で現在も使われている道路は多くあります。特にヨーロッパでは、まだ馬車が交通手段であった時代に作られた石畳の道路が今も使われており、立派に機能しています。その一方で、当時作られた道路で使われなくなった、あるいは現在に対応できなかった道路もたくさんあると思います。その間、どういう変化があったのか。これから先ソフトとか技術の変化をどういうふうに進んでいくかということが一つのポイントになってくるのではないかと思います。

先ほど松尾委員のご発言にありましたように10年、20年くらいで計画を見直していくこと、つまり時代の変化にいかに対応していくかが今後非常に大事になってくるのではないかと思います。ソフトの方は非常に変化が早いと思いますので、変化する方向をどのように読み、その後の社会資本整備をどのように進めていくかを考えることが大事ではないかと感じました。

### 過去の経験から100年先の未来を予測することは難しい

100年先ということを考える場合、100年先のビジョンは私たちの頭には明確に浮かびません。逆に100年前と比べて今がどうかということから類推してみた場合、例えば、創業100年たっている企業がどれだけあり、その中味はどれだけ変化しているかということを考えてみます。

実は、新聞業界というのは非常に特殊な業界でして、創業100年を超えている新聞社が全国に非常に多くあります。各地方紙は全部100年を超えています。古いところは110年、120年。少なくとも1県に1紙は100年を超えている新聞があると思いますので、全国で都道府県の数と同じくらいはあるのではないかと思います。1つの業界で100年を超えた企業が生き残っているというのは稀なケースではないかと思います。しかも新聞は紙にニュースを印刷して売るといった基本的な点は変わっておりません。ある意味では非常に特異であると思います。普通の業界ですと、おそらくかなり業務の中味が変わってきているのではないかと思います。

それでは、新聞社が100年先のことまで考えて経営してきたから生き残ったのか、あるいは、そういう長期ビジョンがあって生き残ってきたのかというと、そうであったとは全く思えません。それなりに経営努力はしてまいりましたが、やはりいろいろな時勢に守られてきたというところがあって今生き残っているのではないかと感じています。これから先100年ということ考えた場合、新聞がこのような形で100年先も何十社も生き残っていくことはほとんどあり得ないと思います。したがって、100年前から見て現在がこうであったから、次の100年も予測できるということは成り立たない、経験によって将来の予測を行うことは難しいのではないかと思います。

- 桑田 宜典 委員（岐阜県県民ふれあい会館 理事長） -



### 人口政策に加え、高齢社会の中での社会資本整備の長期展望が重要

長いスパンで物事を考えるということは非常に重要であると思います。たとえば50年先、100年先の社会をどういうふうに描くかということで最も基本となるのは、須田委員のご発言にありましたように人口というものが規範になるわけです。世界の人口は非常な勢いで増大しておりますが、日本の場合には、今のままでは人口は確実に減少する。例えば岐阜県でいいますと、25年後には30万人ほど減少するという推計を持っております。これは東濃地域に1人も人がいなくなるということですので、これをどのようにしていくか、適正な人口規模ということにつきましてこれから徹底的に対策を講じていかないと、本当に大変な時代を迎えるわけです。

高齢化社会が日本の場合非常に急激に進みましたので、その対応はいろいろな対策が講じられてきましたけれども、これからは人口を増やす対策をどうしていくか、高齢化が進む中で、100年先あるいは50年先をどういうふうに見据えていくかということが非常に重要になってくると思います。

また、そのためにはやはり優秀な人材の育成は欠かせません。将来を担う人たちの育成は今にも増して重要になってくると思います。

さらに、中央集権になりまして約100年ですが、これが今まさに崩壊をしようとしております。今後、地方分権を一層進めて、地方の中で自らが生きる方策、どういう社会を形成するかということで知恵を出していく、そういう時代になってくるのではないかと思います。

- 谷岡 郁子 委員（中京女子大学学長） -



### 社会資本整備計画における具体的なアウトカム目標の提示は非常に評価できる

「まんなかビジョン」において今後の人々からの意見聴取については、できるだけ男女同数を目指したいということも書き込みとしてあったということを見つけて、非常に嬉しく感じております。

その一方で、今日いただいた第3番目の社会資本整備重点計画においてアウトカムをどうするのかということが大変具体的に、真剣に模索されたということで、何となく無責任に希望的な机上の空論をあげたのではなく、徹底して数値目標を様々な形で出してみたいという視点に立っていたということについて、大変感激しています。たとえば干潟であるとか海岸線をどういう形で取り戻していくのかということについて、川辺などについても具体的に出てきたということは、私は大変な感動をもって見させていただきました。

### 計画に入っていない項目について、将来的に必要となれば盛り込むしくみが必要

こういった場ですので、あえて苦言を呈させて頂くならば、具体的に、人道や自転車道がも

っと欲しいという意見が、様々な会合で出ていたように記憶するのですが、これについては今後5年間、10年間でどれくらい作られていくのでしょうか。これは今ほとんどないものであり、そのために、ここに盛り込まれてはいないのであると思います。

今後財政難の中で予算がますます削減されていく傾向にあります。その状況の中で、新しいものを計画に盛り込んでいくことはとても難しいのではないかと憂慮しております。今後増やすべき必要な項目が出てきたときに、それが新しく計画目標に盛り込まれることを保障する仕組みはできないのだろうかと思いました。

### **地方において、人づくりを抜きにしたグランドデザインの達成は不可能**

本日、松尾委員や他の委員がご指摘なさっているように、「まんなかビジョン」において、社会資本整備を実現していくうえでの「人づくり」をどのように行っていくのかということが一番大事であり、私どもとしてもこういう場所で取り上げることができるならば、できるだけ取り上げるべきことであると思います。特に、国が一元化して高等教育政策を行っている中では、これまで高等教育について地方は触らぬ神に祟りなしというような傾向がありました。

愛知県の審議会などにおいて行財政改革などについて議論した際、私は高等教育を含めた生涯学習などに対して、人づくり、産業配分といった関係から、地方としてもっと積極的に関わるべきであり、それを担当する部署があるべきだということを申し上げてきましたが、それはこれまでどうしても手が着けられなかった部分であると思います。地方づくりということは、

一方で、地域づくりのためのグランドデザインを持つということですが、グランドデザインを完成させるための人を育てるということも重要であると思います。これをしっかりとやっていくことが非常に大事であり、計画という面から言えば、人づくりを抜きにしてグランドデザインの達成は不可能であると思います。

### **先の世代のために計画の余白を大きくとるということも見識である**

それから、先の世代のために進化性のあるデザインを必要とするということは非常に大事なことだと思っています。皆さんがおっしゃるように100年先が見通せるかということそれはわからない。そういうときにどうすればいいかというと、本の出版に例えますと、「余白を大きく取る」ということではないかと思っています。すべて計画しきろうとはせずに、余白というものをいかに大事にするかという考えです。都市計画であれ何であれ、我々は地図上を全部埋めつくして、「これは何々ゾーンである」と指定して、計画を行わなくてはいけないと思いがちです。しかし、「この計画はまだ定まっていません、予測不可能です」ということを宣言するということもまた見識ではないかと思っています。

そういう意味で、余白があっても当然とするような考え方に切り換えて、この考えを基盤におかなければ、100年という長さの計画を、現在の時代に閉じ込められている我々が行うことは不可能であると思っています。

### **計画策定時には策定者の性別、世代等の偏りを解消することが重要である**

できるだけよい計画を作っていくということになると、やはり、現在のアンバランスというものをどう解消していくかという視点を取り入れることがとても重要です。先ほど言いましたように、このような議論を行う場における男女の比率という問題や世代の構成に偏りがあると

という問題があります。現在生きている人で100年後にも生きている人はほとんどいないわけですが、50年後に生きている人は10代、20代、30代の中はかなりたくさんいます。おそらく我々よりも長く将来の状況に耐えなければいけない人たちが既に現在かなりの数いるわけです。特に20代、30代の人たちの意見をどれだけ聞いて計画が作られているかというところ、これが随分心許ない話でありまして、例えばこういう懇談会の中にも20代、30代の人1人もいないというような状況があるわけです。

最近メキシコで開催された女性の高等教育に関する会議に出席してきましたのですが、オマーンでは大学の各学部、大学院レベルにおいて、男女必ず同数を取ることが法制化されているということに驚きました。科学系の学部や工学部等に女性の大学院生がどんどん増えてきていて、教員予備軍ができています。イスラム国家であって君主国家であるオマーンでそうなのです。また、トルコでも法律化はされてないのですが、似たような政策を取っていて、現在、工学部の過半数が女性です。さらに、トルコの大学の工学部では現在女性教員の比率が28%になっています。そう考えると日本はいかに遅れていることかと感じます。

世代間であるとか男女間であるとか、あるいは世界的に見てどうなのかというようなことを含めたところの視野の中から、いかに公正で、バランスの取れたものを作っていくかということを保証することなしに、100年間という長期間の計画を考えていくことは不可能であると考えています。

### 今後はリーダーシップよりも仲介者（つなぐ人）の育成が求められる

私はリーダーシップというものがますます信じられなくなるような多様で複雑な社会が今後広まっていくだろうと思います。そのような社会の中では、特殊なエリートとしての人材が人々を率いていくという発想自身が不可能です。人材養成をする場合に、今後必要になっていく能力はリーダーシップであるよりは、むしろメンターシップすなわち仲介者であると考えています。社会の中で触媒になり、カタリストになり、あるいは話し合いにおける議長になるような人々の存在がむしろ重要になっていくのではないのでしょうか。我々はリードする人とされる人の養成ばかり考えてきたわけですが、そうではなくて、つなぐ人の養成を真剣に考えるべき時期に来ているような気がいたします。

- 渋谷代一郎 委員（日本政策投資銀行 東海支店長） -



### 計画をつくるだけでなく、実現に向けた行動と将来を見据えた計画の見直し、改善が必要

松尾委員のご発言の通り、社会資本を100年のスパンで考えるというのはもっともなことだと思います。ただ、100年といってもかなり先のことです。そのスパンを40、50年とか10年、20年、あるいは5年や1年で切って具体的に考えていく。ビジョンを作るだけでなく、実際に行動することが大切だと思っておりますので、「まんなかビジョン」の中にも「マネジメントサイクル」という言葉が出ていましたが、最近流行の言葉で、「P(Plan), D(Do), C(Check), A(Action)」という言葉があります。プランを作るだけでなく、行動に持っていかなくては

いけません。そして、チェックをして、そこでよくなければまた戻してアクションを行う。そのように先を眺めながら、政策を実現していくことが大切ではないかと思っています。

### ユーザーの視点からみて、インフラ上のソフトがいかに有効に機能するかが重要

中部国際空港が2年後にできるとか万博が2年後に行なわれるということで、鉄道の方も、中部国際空港にしる万博会場にしろアクセス線ができます。私はそのようなものをイメージしてインフラについて考えているのですが、インフラはあくまで基盤ですから必ずその上に何かが載るものだと思います。それはハード(もの)であったり、あるいはソフト(サービスのなもの)であったりすると思うのですが、ビジョンよりもむしろ、上に載るものがどうであるか、いかにそれらが有機的に結びついて、有効に機能を発揮するかということが大切であると思います。ビジョンを作り、インフラを実際に作るときにはこれが有効に使われるだろうということを想定して作るわけですが、実際にインフラが有効に使われるかどうかということが非常に重要ではないかと思っています。

有効に使われるという点で言えば、松尾委員のメモにもある通り、ユーザーの視点が重要だと思います。いかにうまく使われるかということが大切で、先ほど申しました「P(Plan), D(Do), C(Check), A(Action)」もいかに有効に使われるかということのチェックになるのですが、それを繰り返して実効を上げていくことが大切ではないかと思っております。

### 中部地域の豊かできれいな水と緑を観光資源としてうまく活用してはどうか

「まんなかビジョン」の中には観光振興ということもうたわれておりますけれども、情報発信だけではなくて、いかに人に来てもらうか、来させるかということが重要で、いかに「売り」につなげるかということも非常に重要なのではないかと思っています。ビジョンはビジョンで大切ですが、いかに有効にインフラが活用されるかということが大切ではないかと思っています。

中部の4県を廻って感じる印象ですが、当地域は水が非常に豊かできれいな地域だと思います。当地域にはいろいろきれいな川があります。静岡県ですと富士山の湧水がきれいで豊富にあります。この地域は緑もかなりきれいであるという印象があり、そういったものを観光資源としてうまく利用できないかと思っております。

- 東委員(東海大学短期大学部 助教授) -



### 質の高い公共空間の整備によって住民の公共心・美意識も育まれる

清水港の景観づくりでは、「景観10年、風景100年、風土1,000年」を標語として市民と行政と民間の企業との協働作業を継続し、10年経ってやっと美しい風景が生まれました。地域の活動を通して思うことは、人材育成がやはり大事であるということです。

私は、日頃から公共事業の整備、公共空間を作り上げることは、地元の人たちの意識の向上に寄与することではないかと思っております。その公共空間をどう作っていくかということが、例えば公共心を育てたり、機能性に対する意識を深めたり、美意識

を育てていくのではないかと考えております。

これからは、そういった意味で、今まで日本に住む我々が経済成長に追われた時代の中で見失っていた美意識、美しさというものを大事にし、地域の人たちがそれを維持し続けること。それが公共事業なり社会資本整備の本来のあり方ではないか。質の高いもの、本当によいものをつくって、時間をかけてみんなで育み、維持していくというのが大事なのではないかと考えている次第でございます。

### **住民と行政が新しい公共意識を持つことが必要**

将来の国づくり、まちづくりに関して、いろいろな活動を進める中で感じることは、社会が変わり、行政と住民の関係も変わりました。行政間同士でも変わってきていると思います。その意味では、我々は新しい公共という意識を持つ必要があるのではないかと考えております。住民は行政に対して「やってちょうだい」とだけ申します。行政の方は指針を作って、住民のニーズを把握しないで計画を進めても平然としています。これは体質の問題であります。今まではそういった社会において経済大国、日本が築かれたのだと思いますけれども、これからはそれぞれが体質改善をしていかなければならないと考えております。

協働、パートナーシップのあり方をこの何年間かで作っていく。新しい公共の考え方や新しい社会資本の整備のあり方というものが私たちの中に培われていき、パートナーシップとしてお互いに役割分担ができていくのではないかと思いました。

### **女性にとって働きやすい、子育てしやすい環境づくりが社会資本整備においても大事**

少子高齢化社会という中で、女性が子供を産みにくい環境にあるのも現実ではないかと考えております。そういった中で、社会資本の整備を考えると、女性が働きやすく子供を育てやすい環境づくりが一番大事なのではないでしょうか。これはハード面におきましてもソフト面におきましても日頃感じる次第でございます。

### **「まんなかビジョン」に「美しさ」という観点が盛り込まれるとよい**

この「まんなかビジョン」については、「美しさ」という観点を盛り込んでいただけたらよいと思います。今、国全体としましても「美し国づくり」という考え方で、従来の画一的な整備から魅力ある、個性ある地域づくりを目指しています。その際に地域それぞれの魅力ある個性ということが美しさにつながってくるとは思いますが、そういった観点が大変重要であるかと考えております。